

社会文化的視点から捉える日本語学習方略に関する研究

著者	尹 得霞
号	4
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教情博第30号
URL	http://hdl.handle.net/10097/60359

イン トク カ
尹 得 霞

学 位 の 種 類 博士（教育情報学）

学 記 番 号 教情博 第 30 号

学位授与年月日 平成 26 年 11 月 26 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当

研 究 科 ・ 専 攻 東北大学大学院教育情報学教育部（博士課程後期 3 年の課程）
教育情報学専攻

学 位 論 文 題 目 社会文化的視点から捉える日本語学習方略に関する研究

論 文 審 査 委 員 （主査）
教 授 北 村 勝 朗 准教授 中 島 平
教 授 熊 井 正 之

＜論文内容の要旨＞

本論文は、第二言語としての日本語学習における自然な日本語習得に焦点を当て、日本語学習方略と学習環境の再構築を企図した研究である。そのために本研究では、「自然な日本語」の再定義と問題点を整理した上で、「自然な日本語」が習得される要因を明らかにし、日本語学習の現場での実践研究に理論的基盤を位置づけ、実践化する際の学習環境改善の手立ての提案を試みている。

本論文は、7 章によって構成されている。第 1 章から第 3 章において中国の大学の日本語教育における「自然な日本語」を考察対象とした本研究の意義を確認し、先行研究の検討を通して日本語学習現場において「自然な日本語」の学習を実践する際の理論的枠組みの確立の重要性、および方法論的な妥当性について考察を行っている。第 4 章から第 5 章において、ジャーナルアプローチを用いた 2 つの教育実践を取り上げ検討することで、学習体験の共有の観点から日本語学習における学習観の変容について論じている。第 6 章において、社会生活の中での日本語学習実践を取り上げ、心理的な体験の共有の観点から日本語学習における

社会文化的視点の重要性について論じている。第7章において本研究のまとめとして、第二言語としての日本語学習における社会文化的視点からの考究の課題について論じている。

まず第1章において中国の日本語学習における「自然な日本語」を考察対象とした本研究の意義を確認し、今日の中国における日本語学習の問題点と課題が整理されている。こうした作業をふまえ、第2章では、「自然な日本語」の定義を、文脈、状況、文化社会的背景、および相互関係の側面によって示した上で、「自然な日本語」学習を実践する際の理論的枠組みの確立の重要性について説明を行っている。更に先行研究の通観により、中国における日本語学習の在り方を問い直す重要性について考察を行っている。第3章では日本語学習の研究における方法論としての質的研究法について論じている。第4章では、ジャーナルアプローチを活用した授業実践を取り上げ、物語リレーの作文活動と学習者同士の相互作用を通じた学習者における日本語の学習観の変容について論じている。第5章では、ジャーナルアプローチ活動を体験した後、来日して日本の文化社会の中で日本語と触れる機会を得た日本語学習者を対象とし、中国での日本語学習と日本での日常生活を通じた学習との比較から学習方略の変容に及ぼす文化社会的背景の作用について論じている。第6章では、スポーツの技能習得という実践的な場面における日本語習得の過程に焦点を当てた検討を行っている。以上の分析をふまえ、終章の第7章において総合的考察が加えられ、次の3点を導いている。

第1に、従来、曖昧に捉えられていた第二言語学習における「自然さ」の学習の内容は、異文化の言語活動への参加と葛藤の克服という学習活動によって捉えられることを確認している。またそれらは、学習者同士が互いに影響を与えながら理解を形成していく点を明らかにしている。第2に、日本語学習における学習者同士の相互作用は、文化社会的背景を含めて相手の表現を受け取り自身の体験と重ね合わせることで生じる視点のズレを契機としている点を明らかにしている。更に言語生活に参加することがそうしたズレの克服につながる点を提示している。第3に、日本語学習をアプロプリエーションの視点から捉えることにより、学習者に求められる異文化共有体験が再定義されている。そこでは、習得した知識や技能に対して能動的に意味づけを行って社会参加を展開する存在として学習者が位置づけられた上で、そうした学習においては個々の学習者の異文化葛藤を軽減することが有用である点が示されている。こうした考察から、日本語学習における自然な日本語習得の在り方が社会文化的アプローチの視点により体系化されている。

＜論文審査の結果の要旨＞

第二言語としての日本語の学習における「自然な日本語」を学術的に捉え研究の対象とした例は少なく、実践的な会話練習や多様な教材を活用した学習の実践に関する技術論の展開に重きが置かれることが多い。そうした現状の中で、本論文は、「自然な日本語」の学習を文化社会的視点から再考することで日本語学習の在り方を問い直し、理論的基盤を整理した上で、いわゆる知識や技能の習得を含めた文化的道具の習得としての学習の視点と同時に、

異文化に参加する過程を学習過程と位置づけ、他者との対話を通して他者に属するものを自己のものにする過程としてのアプロプリエーションの視点から学習を捉え体系化を行った。それにより、これまで文法偏重や学習方法の問題として捉えられる日本語学習活動を社会文化的観点から検討し、新たな提言を行ったものである。

論文審査の結果、以下の点が指摘できる。

第1に、日本語学習を「自然な日本語」の視点から検討し体系化するという本論文の視点は独創的であり、先駆的研究として評価できる。第二言語学習活動を知識や技術の習得として捉えるのではなく、文化、文脈、体験の取込みと共有、軋轢と葛藤という社会文化的アプローチの立場に基盤をおき、言語生活への参加という日本語学習の概念に理論的根拠を位置づけ体系化した点は今後の日本語学習研究および実践における新たな視点を提示したものである。

第2に、自然な日本語の習得を単に理論的に考究するのではなく、実際の授業現場や留学生活における学習体験を取り上げ具体的事例として考察対象とし論じていることが評価できる。それにより言語学習活動における文化適応体験の分析が可能となっており、今後、日本語に限らず、多様な第二言語学習での実践に大きく寄与し得る重要な知見として期待できる。

第3に、対象者の学習体験を縦断的に捉え考察することにより、学習観および学習方略の変容過程を厚みのあるデータによって詳細に分析し、習得した知識に対して能動的に意味づけを行い社会に参加していく学習の過程を描写している点が評価される。本論文の成果は、高等教育における第二言語学習の在り方を問い直す上で一つの視座を占めるものとして評価される。

他方、本論文にはいくつかの課題を残している。

第1に、第二言語学習を、伝え合う関係の観点から捉え体系化している点で評価されるが、それを学校教育現場でどの様に具体的に展開していくか、展開した上でどの様な効果と課題が表れるのかについて、十分に示されてはいない。今後、教育実践の場における、より具体的かつ詳細な考究が求められる。

第2に、本研究で、学校教育における教師や大学生を中心とした学習集団における言語学習活動実践を対象として考察を行っているが、より多様な学習場面や学習集団を対象とした言語学習活動の実践の在り方についての議論は不十分であり、自然な日本語習得における場の検討については課題が残されている。かなり入念に先行研究をふまえ理論的根拠を読み解いた上で丁寧に分析がなされているものの、今後、更に多様な事例の考察を蓄積することによって、より精緻な体系化が求められる。

第3に、研究によって示された学習方略の在り方の普遍的妥当性の問題である。本論文で示した成果が学校教育以外の場面や、多様な熟達段階にある学習者に対していかなる意味をもつのか、今後、多角的に検討することが重要な課題として残されている。

しかし、本論文を全体として見れば、日本語学習の原理的基盤を詳細に集めまた実際の授業現場での事例も考察対象としながら学習者の体験に関わる情報を丁寧に集め分析作業を重ね、一つひとつの研究を着実に展開しており、日本語学習を社会文化的観点から体系化を

試みるという本論文のねらいはほぼ成功していると判断できる。

よって、本論文は博士（教育情報学）の学位論文として合格と認める。